

Magnolia

——華開世界起なり

上田敦子

年明けに、友人と訣れていた。そのことが深く関係していたことは確かだ。ただ、そればかりではなかった。

三月の明けがた、とある道すじで見あげた一本の樹 Magnolia. —— それに端を発し、同じ時刻の同じ蕾をつける樹を探しに、憑かれたように近隣を歩きまわりだしたのだ。やがて徐々に膨らんだ蕾が、一斉にはじめてひらいた日を境に、明けがたの私の徘徊はびたりと止んだ。

起床して日常を滞りなく過ごし、また床に就く単調な日々の繰りかえしの中かで、ときとして人はあのように切なく、奇妙な衝拍におそわれることがあるのだろうか。

薄闇の中かで垂直に上向く蕾が、今しかここにはとどまらない、と告げていた。

記号や周波数の分析などではけして測定できない、物の質感のことをクオリア *qualia* というそうだ。たがいに囁きかわしながら、明日にもひらかんとする蕾たちの気配は、それを人がなぜそう感じるのか、たしかに科学でも哲学でもとうてい規定しがたい。

かたく秘めた芯を解くまいとする花卉が、みずからを同時に包む世界全体であること。その枝枝は、時間と空間とが一本の樹の、一つの呼吸で、膨脹しあるいは収縮する場所であることを見せているのだった。

最後に訪ねた友人のホスピスの部屋には、どういうわけか大きな鏡が置かれていて、彼女はそれを窓のほうへ向けていた。理由は聞かなかったけれど、春を待っていたのだとおもう。

閉ざされた冬枯れの庭のなかに、誰よりも先に、彼女はそれを見つけたかった。鏡のなかへ流れこむその息吹もろとも、充ち溢れていきたかったのだとおもう。

* マグノリア (木蓮)

* 道元『正法眼蔵・梅華』